（第三種郵便物認可）　中国

職場体験で4割就職

スタッフ充実で成果

広島 元非行少年の就労支援

NPO、資金確保課題

広島県内の元非行少年たちが企業で就労体験をしながら、就職先を探すNPO法人県就労支援事業者機構の事業で、昨年1月～ことし2月に参加した53人のうち約4割の22人が体験先の企業に就職したことが8日、分かった。県の雇用対策の一環で、委託金を受けた同機構がスタッフを増やし、受け入れ先の開拓や少年へのきめ細かい支援を進めたのが奏功した。ただ、委託金がない本年度は、体制の縮小を余儀なくされ、資金確保が課題となっている。

（久保友美恵）

就労体験は5日間で、中小業者を中心に土木建築会社や飲食店、福祉施設などが協力。保護観察中の少年少女や刑務所を出た若者たち計53人を受け入れ、そのうち22人がそのまま就職した。進路を真剣に考えるようになり、自ら就活を始めた例もあったという。

例年は、同機構が就職先を仲介し、面接を受けてもらう。就職が決まる元非行少年たちは年間10人余りだったが、今回は大幅に増えた。

この事業は、県が国の緊急雇用対策基金を財源に約4千万円で同機構に委託した。従来、少年たちを直接支援するスタッフは1人しかいなかったが、刑務所の元刑務官たち6人を雇い、受け入れ先を探した。スタッフが充実することで、「非行仲間の誘いを断れない」との悩みを聞いて抜け出す手助けをしたり、就職に不利なタトゥーを消す手伝いをしたりと、少年への個別フォローも強化できた。

支援に当たった保護司の月原広政さん(66)は「規則正しいリズムで5日間働くこともしんどい子が多かった。でも、叱咤激励し見守り続けることで、前向きになり始める変化を何度も見た」と話す。

ただ、本年度は、県からの委託金がなくなり、人員を従来の体制に戻した。就労支援の充実には資金確保が必要だ。県県民活動課は「まず、モデルケースとしてやってみた。結果を分析し、県として何ができるかを検討したい」と説明。同機構は「丁寧に支えるスタッフがいれば、成果が出ることが分かった。自治体や企業に支援を求めていきたい」と話している。

クリック

広島県就労支援事業者機構　元受刑者や元非行少年の就職を支援し、再犯防止を目指すNPO法人。県内の企業経営者や保護司たちが2010年に設立。雇用に協力した企業に助成金を出したり、非行少年たちにタトゥー除去費を補助したりして、就労を促す。会費や上部団体の助成金が主な活動資金で、年間千円以上の会費を払う会員は現在、約470個人・団体。

少年（手前）が働く姿を見に来た西井さん。少年は作業の内容を紹介していた

リフォーム会社で汗流す少年

「一歩ずつ頑張ろう」

「できる作業が少しずつ増えるのが、うれしい」。広島県就労支援事業者機構の就労体験をきっかけに、1月から広島市西区のリフォーム会社で働く少年(16)は、荒れた中学時代から一転、社会人として汗を流す日々を送っている。

保護司で同機構のスタッフだった西井一宣さん(67)が仕事場を訪ねると、作業の内容を誇らしげに説明する。塗装作業の合間に笑顔を見せると、西井さんの顔もほころんだ。

荒れ始めたのは中学2年だった2012年。夜に集まる友人の輪に加わり、生活の昼夜が逆転。万引や自転車盗を繰り返した。3年の時に教師を殴って逮捕され、保護観察処分となった。通信制高校にもほとんど通わずに過ごした。

そんな時、近所に暮らす西井さんが「働いてみんか」と声を掛けた。「このままでいいんかな」と焦りを抱えていた少年は話に乗り、14年秋に飲食店で皿洗いや接客を体験。5日間だったが、働く大変さを肌身で感じた。同時に「自分に合う仕事は何か」と考えるようになった。職人仕事への憧れもあり、西井さんに「塗装の仕事をやってみたい」と伝えた。

西井さんは、少年が電車で通える範囲で探し、リフォーム会社「エミシア」を見つけた。電話で「保護観察中の子ですが」と説明。吉田周平社長(37)は面接を引き受けてくれた。眉をそり敬語もあまり使えない少年を見て「根は素直そうだし応援しよう」と採用を決めた。

社員は8人。道具の名前も作業内容も分からないことだらけ。先輩には「遅い」とよく怒られ、そのたびに「腹が立った」。朝早く起きるのも一苦労で、欠勤した日もあった。だが、社長は「ゆっくりでええ」と見守った。西井さんも10日に1回は会って、愚痴や反省に耳を傾けた。

いつも厳しい先輩が「様になってきたの」と言ってくれた時があった。「あざっす」と軽く答え、心の中で「一歩ずつ頑張ろう」と誓った。

心配をかけてきた母親は毎日、ペンキで汚れた作業着を洗ってくれる。金を稼ぐ大変さを感じ、母親の苦労を考えるようになった。「給料でごちそうしよう」。そんな思いも抱く。

「学歴も経験もない自分に働くチャンスをもらえて本当にありがたい」と少年は感謝する。西井さんは「一人一人の立ち直りが積み重なれば、社会全体にとって大きな意味がある」と見守り続けている。

（久保友美恵）